只見短歌会　八月詠草

大塚栄一　指導

雨戸明け漸く咲きし鉄せんの色濃きを眺め一人朝茶す　馬場　八智

何もかも言ひて心は淋しかり言はぬをひとつ残しおくべき　小倉キミ子

幼孫おとなになった気分らし我の面倒見てくれるらし　目黒　富子

帰り来て病む夫労はる孫娘その身も障害もちゐてをるに　渡部ゆき子

絵手紙のつゆ草同じところより三度咲くとふ友に聞きたり　関谷登美子

残業の嫁に代はりて保育所の孫を迎へに行けば纏わる　新国由紀子

歳重ね古希を迎へし夫のため子等祝ひくれ宴に招かる　渡部ヨリ子

こぶし苑に入所の友と久びさに逢ひたる夕べの日記はながし　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　九月例会

目黒十一　指導

餌ころげ側溝のぞくカラスの子　味代子

秋日暮客二人なり日本丸　吉　児

稔り田のどこまでつづくバスの旅　弘　子

くさむらにみじかき丈の野菊濃し　幸　生

夏椿妻も短く髪を切る　恒　夫

鬼やんまガラス戸たたく目に涙　信

小形なりさんま届きて光りおり　一　穂

葉に盛って隣に分ける小芋かな　都

三日のみ子等の声聞くお盆かな　修　一

畑しごと終わるや村に秋夕焼　礼

麟閣を囲む城垣秋の色

お薬園の池に家鴨や秋うらら

子役の声杜より高く村歌舞伎

観客がセットに手貸す村歌舞伎

野仏の笑顔に惹かれ秋高し

高々とススキ伸びたる廃屋

姉弟喧嘩相手や水鉄砲

サンダルで海のかおりをつれて来る

蜩やなるがままよと栗巨木

雲の峰無機質と云うダムに触れ